
リアルワールド

光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルワールド

【Nコード】

N3770J

【作者名】

光

【あらすじ】

普通をこよなく愛する刹那。目立つことが嫌いで、普通だといふことがモットー。だというのに、それはなんの合図もなく音を立てて崩れ去っていく。擬人化してしまった愛犬に、性転換してしまった幼馴染。さらには中学時代からの友人が……。刹那を中心に、人類の存亡をかけた神との戦いが今、始まる。

プロローグ（前書き）

ども、コウです。早くも二作目を出しました。

まだまだ新米なので、矛盾点等がありましたら、指摘してください。
とありがたいです。

では、お楽しみください

ブローグ

「なあ、クウ。お前、何がしたいんだ？」

シベリアンハスキーと呼ばれるオオカミに似た犬に、飼い主である桜野刹那は、むなしい質問を試みた。

クウは聞いているのか聞いていないのか、桜野家の決して大きくはない庭で、ものすごい勢いとともに犬かきで地面を掘り起こしている。

へっへっへっ、と荒い息をしながら何が楽しいのかひたすらに。そんな様子を、かれこれ十数分間縁台に腰掛けて、膝に肘を立てながら見ていた。

「ん？」

あんなにも勢いがあつた土木作業がピタリとやんだ。

クウは掘った穴に顔を突っ込み、何かをくわえていた。

「なんだそれ？」

何がうれしいのか、ぱたぱたとしつぽを振りながら近づいて、刹那を見上げるようにして口にくわえているものをさし出した。

「ん？ 水晶玉か？ これ」

手に有り余るほどの、大きな水晶玉。土にまみれて汚くなっているが、見たところ傷が付いたような跡はない。

土を払い、とりあえず、太陽にかざしてみる。伊達眼鏡である黒縁めがねを邪魔なので外し、目を細めてみる。

何の変哲もない、ただの水晶玉。

「んう？ …… よし、捨てるか」

何となく嫌な予感。あたりすぎるこの感覚が怖いため、刹那は元の場所に埋めることにする。

クウはそれを珍しそうにのぞきこんでくる。

「いいか、クウ。こういうものは面倒事を呼び起こすんだ」

怒られたと思ったのか、頭を垂れて落ち込む。

そんな愛犬の様子に苦笑しながら、

「お前は悪くないよ」

そう言いながら頭を撫でる。

しっぽを振りながら再び元気になる。

「これでよし、と。クウ、来い。汚れたから洗ってやる」

これが、夏も近い、ほのぼのとした純一の日常であった。

「あぢい……」

まだ六月だというのに、肌を焼くような日照りにじっとりとした蒸し暑さ。これだけはどうにもならないとあきらめていても、つぶやかずにはいられないのが人間の性。

両親ともに仕事で不在の桜野家は、刹那とクウの独壇場であった。学校が休みの今、刹那はクーラーが壊れた自室で、自分専用の扇子で仰いでいた。

一人、というか一匹ではさびしいのか、クウも刹那に寄り添ってけだるげに寝ころんでいる。

「お前も暑そうだな」

冬になると羨ましくなるほどの毛をもつ犬だが、夏になるとかわいそうになってくるのは刹那だけではないだろう。

憐れみもこめて、自分だけに向けていた扇子をクウにも分けてやる。

すりすりとき寄り添ってくるクウは、なぜか刹那にだけ異様になつく。

かなり頭がいいらしく、刹那言うことをすべて聞いてくれるのだ。「暇だし、寝るか」

一欠伸した刹那は、目を閉じた。そして数秒後、静かな寝息をかき始めた。

——ボオン、ボオン

聞き覚えのない音が、頭の中に響き、そのせいで刹那は起きてしまった。

「……なんだ？」

寝ぼけ眼を覚まそうと、刹那は目をこする。

クウもそうなのか、キラの横腹に顔をこすりつけながらムクリと起き上がり、あたりを見回す。

意味もなく伊達眼鏡をかける。

「……なんだ？」

もう一度。刹那の目の前には、水晶玉が浮いていた。

クウは、その水晶玉に毛を逆立てて威嚇している。

——ボオン、ボオン

聞きなれない、鐘を鳴らしたような音は水晶玉から出ているようで、先ほどから鳴りやまない。

刹那は、よくわからないが止めようと手を伸ばすと、水晶玉は淡い光を発す。

——イイイイイン

今度は人間が生理的に受けつけないような、とてもとても甲高く耳につく音。

思わず耳を押さえる刹那。クウも耳をタラリと下げて器用に耳をふさいでいる。

「……あの！」

拳を作り、水晶玉を殴りつける。

嫌な音はそこで止まり、

世界が“ズレ”た

物が二重に見え、ついには三重に割れ、最後に周りが暗くなった。

「あつ……？」

眩きが跳ね返り、虚空に消えていく。

足元を見れば、意味がわからない言葉で描かれた円。と、混乱して刹那の足元にくつつくクウ。

——ドクン

「ぐっ……」

心臓が、暴れ出した。

——ドクン、ドクン

何も言えずに崩れ落ちる刹那。

——ドクン、ドクン、ドクン

暴れ出した心臓は、止まることなく血液を大量に循環させる。
あまりの苦しさ、あまりの熱さに、呼吸困難に陥る。

そこで刹那は、気を失った。

プロローグ（後書き）

ども。どうでしたか？ よくあると言われたらそれまでなんですが。

とりあえず、宣伝を。僕の最初の作品、『竜と世界と最強夫婦』もよかったら読んでみてください。

ということ、これで。これからよろしくお願いします。

第一話 リアルワールド（前書き）

ども、コウです。少ない量だったので、なんかすぐに投稿することができました。

サブタイトルが小説タイトルと同じなのは勘弁してください。ほかにいいのがあるかなかったです。

ということで、楽しんでみてください。

第一話 リアルワールド

「……ね……ねえ……」

刹那は、誰かに呼びかけられながら揺さぶられるのを感じていた。
「ねえってば！」

「……ん……の？」

よくわからない寝言をつぶやきながら、刹那は体を起こす。
しょぼしょぼになっている目をこすることによって治し、自分を
起こしたのであろう人物の方向へと顔を向ける。

「……は？」

刹那の目には、あり得ない格好の人物がいた。

まず髪の色。完璧な銀髪。瞳は、紅と蒼の珍しいオッドアイ。

「ん？」

かわいらしく首をかしげる銀髪少女の頭の上には、ひょこひょこ
と動く、おそらく犬の耳。

さらに、全裸。

「君は、誰かな？」

思いつき顔と視線をそむけ、銀髪少女に尋ねてみる。

「誰って、クウだよ？ 忘れちゃったの？ ご主人様」

ばっ、という感じでその少女に振り返って見る。

確かに、オッドアイは愛犬クウの特徴だった。それに、右耳の先
が少し割れているところも。

まじまじと見ていたのだが、よくよく考えるとまだクウが全裸だ
ったことに気付き、また顔をそむける。

「た、確かにクウだな。で、なんで人間になってんだ？」

「こつちむいてよお……あのね、ご主人様がそばに倒れてたから、
人だったら助けれるのにな、って思ったらいつの間にか人になっ
たの」

「そ、そうか……なんか着るものがないのか？」

「あう……服着るの嫌なんだけど……服なんてな……あれ？」

目をそむけるだけでなく、背を向けるようになった刹那。その後ろでもそもそと動いている。

「どうした？」

「なんか、服あった」

はい？　と思いながら刹那が後ろを振り向くと、白いワンピースのようなものを着たクウがいた。

「……まあいいか」

「えへへ。これでいいんだよね」

何がうれしいのか、笑いながら抱きついてきた。甘えん坊なクウは犬の姿でも膝の上に乗ってきていたので、何となく自然な感じがしてそつと抱きしめてやる。

「んふふ……」

「……で、何をすればいいんだろうな？」

とんとんと抱き締めているクウの背中をたたきながら、周りを見渡す。

今二人がいるのは、森の中。その中でも開けた場所にいるようで、光がさしている。

——ヴー、ヴー、ヴー

「携帯？」

ジーンズポケットの中にある携帯が震えていた。クウは刹那のそばにずっといたためか、それにはあまり興味を示さなかった。

「……誰だ？」

液晶画面に表示されてあるメールアドレスだが、まったく見覚えのないものだ。

迷惑メールか、とも思ったが、電波の棒を見ると圏外になっている。

ますます意味がわからなくなる。圏外なのにメールを受信したの

だから。

とりあえず、見てみる。

『ごきげんよう、選ばれし人間たち』

初めがこうだった。

「選ばれし人間……？」

「ご主人様……私にも見して」

「字読めるのか？」

「うん」

もともと刹那の腕の中で動き、胡坐をかいた間の中に座るような形になる。

『君たちは今、自分がどのような立場にいるかわからないだろう。だが大丈夫だ。今から私が一からすべてを説明しよう』

「俺たち以外にも人がいるって言うのか？」

「な、なんか、げえ^{ゲーム}むみたいなことになってきたね」

動物好きの刹那は、この状況でもかかわらず、舌つ足らずな言葉でしゃべるクウが可愛くて、頭を撫でてしまう。

「わう……」

クウはうれしいのか、耳をへたりと下げ、目を細める。

今気付いたが、しつぽがあり、動いている。

『君たちがいるその場所は、地球ではない。私が創った世界、リアルワールドだ』

「マジでゲームの世界みたいになってきたな」

「りあるわーんど……あう？」

『君たちを呼んだ理由は単純明快。少しゲームをしてほしいのだ』

「はあ……なんかめんどくさそうだな」

「めんどーめんどー」

『人間が、どこまで高みに登れるのか、少し興味を持ったのだ』

「すんげえくだらねえ」

「くだらんくだらん」

『願わくば、私の元、つまりは神の領域まで来れるのか、を』

「ぜってーイタイやつだな」

「いたい？」

「おかしい、ってことだよ」

『もちろん、君たちにはそれぞれ能力を与えようと思う。そうでもない、この世界では生き残れないのだからね』

「能力……魔法とか超能力とかか？」

「……わかんない」

『超能力のようなものだと思ってもらって構わない。魔法のようなものもたくさんあるがね。あともう少しすれば、特殊な電波をこの世界中にめぐらし、自分の能力がわかるようにする。これで能力の説明はおしまいだ。次に、この世界についてだ』

「そうだ。この世界からの抜けだし方とかないのか？」

クウはつまらなくなったのか、再び回転して抱きついている。

『この世界には、魔獣というのが徘徊している。大体想像している通りの存在だ。それを能力で倒すのだ。そして、これが重要だ。この世界は、百層もの層で成り立っている。君たちがいる層は第一層。そして、神であるこの私が第百層で待ち受けている。それがどういうことかわかるね？』

「第百層まで来いってことか」

『これでとりあえずの説明は終了だ。これ以上教えると、面白みがないからな』

「すんげえ殴りてえ」

『ああ、書き忘れていたが、地球の時間は止まっている。そして、その時間を再び動かすには、私を倒すことが必要だ。もし、私を倒すものがいなくなれば、すなわちこの世界で君たち全員が死んでしまった場合、地球は破滅する』

「いよいよふざけてきてんな」

『この世界で生き残るヒントだが、まずは私が創った村や町などに向かうといい。そこには強力な魔獣除けの結界が張っているため、容易に魔獣が入ることはないはずだ。そして、ギルドを作ることだな。それぞれの層の中心にダンジョンがあり、それを攻略し、そのボスを倒せばいいのだが、まず一人で立ち向かえるものではない。死にたくなければ、ギルドを作るか入るか、どちらかにすることだ。では諸君、健闘を祈る』

そこで、メールは終わっていた。

「……はあ。俺の不幸もここまで来ると笑えねえな」

財布を落として二万円ほど失ったり、家の鍵をなくして一日ネットカフェで過ごしたり、学校から自転車で帰る時サドルだけを盗まれているたり。

そんな感じで不幸が襲ってきていたわけだが、今回は規模がでかすぎる。

「とにかく、適当に歩いて森を抜けるか。ほらクウ、行くぞ」

いつの間にか、刹那の肩を枕にして眠っているクウを、背中をたたくことで起こし、手を引いて立たせる。

まだ寝ぼけているクウとともに、刹那は森を抜けるために歩いて行った。

第一話 リアルワールド（後書き）

ども。どうでしたしょうかね？ ちょっと最近読んではまった小説のパクリみたいな感じになったんですが。
では、これからもよろしく願います。

『竜と世界と最強夫婦』のほうもぜひ、読んでください

第二話 能力（前書き）

ども、コウです。

えと、特に書くこともないので、本編をお楽しみ下さい。
では、どうぞ。

第二話 能力

——イイイイイイン

聞いたことのあるような甲高い音が、刹那とクウの頭に響いた。

「……っ！ これは……」

「わう……」

耳を閉じたクウは、刹那に抱きつき胸に顔をうずめている。

森をようやく抜けて、ふさふさの草原に出た途端、それが襲ってきたのだ。

ようやく音が鳴り終わり、二人は息をつく。

「なんだったんだ……今の」

『能力名：言霊^{ことだま} 能力：念じながら発した言葉、あるいは想像^{イメージ}を現実^{イメー}に顕現する能力。いわゆるチート。ランク：神』

続けざまに、刹那の頭にはこのような言葉が機械音で響いた。

「これって……能力の説明か？」

「ご主人様、私も聞こえたよ」

ぱたぱたしっぽを振って抱きつきながら報告してくるクウの頭を撫でる。

「なんだった？」

「えっと……能力名が『犬魂^{いぬだまし}』」

「なんだそりゃ？」

「わかんないよう……それで、能力が願うことで擬人化が可能。で、犬のときも人間のときも、しんたいきょうか？ ができるって」

名前と能力の内容がマッチしてねえ、などと思う。だがこれで刹那もわかった。クウは能力のせいで人間になったのだと。

「そついや、ランクとかあったか？」

「うん。しんじゅう、だって。なんだろうね？」

本人でもよくわかってないようだ。

とりあえず、聞かれたので考える。ゲームやラノベで埋め尽くされた頭で考え、出てきたのは、

「神獣……神の獣、てことじゃないか？」

それが一番近い答えだろうと、刹那は考える。どうせファンタジーで固められた世界なのだ。それ以外には何も無い。

「どうでもいいや。ご主人様はなんだったんですか？」

聞いておいてそれかい、と突っ込みでも入れておきたかった刹那だが、やる気もなかったので自分の能力を教える。

「はわあゝ……じゃ、ご主人様、最強だね！」

「面倒だから嫌なんだけどな……」

「ほえ？ でもご主人様、剣道がすごい強かったよ？」

「あれからだよ……たださえ嫌々やっていたのに、注目されるなんぞ我慢ならん」

実は刹那は、剣道の師範の資格を持っている。そして、日本で一番強かったのだが、何分面倒なことと目立つことが嫌いな刹那は、人前で竹刀を振ることはなかった。

暇つぶしによく素振りをしていた程度だ。

「ま、でもこれで魔獣とやらが出ても大丈夫だな。刀でも作ればなんとかなるし、クウもどうにかできるだろ？」

「うん。……あ、あれなんだろう？」

風で揺れる草原の先を、クウは指をさす。

だが、どれだけ目を凝らしても、刹那には何も見えない。それでもクウは手を下げない。やはり、もともと犬であるクウは目がかなりいいということか。

——アアアアアン！！

突然、目を凝らしてみている先に、豪雷が“発生”した。

「ご主人様、乗って！」

正義感が強いクウは、早くも犬に、というか人が乗れるほどの大きな銀狼の姿に変わり、刹那にそう急かした。

ここで直感で嫌な予感が発動するのだが、あの雷の発生の仕方はどう考えても人工的で、その場合何かがあるということ。なら、刹那のモットーで人助けをしないわけにはいかない。

結局のところ、刹那はその計り知れないお人好しさでトラブルに巻き込まれているのだ。

「クウ、全力で！」

「あいです！」

刹那を乗せたクウは、全速力で駆け抜けていった。

——イイイイイイン

『能力名：超電磁砲^{レールガン}。能力：体内に無限の電撃を内包し、それを何かを媒体として放出したり、なしでも雷を放つことができる。ランク：巫女』

「……なにこれ」

とある草原で。制服姿で、セミシヨートの茶髪の少女が一人ポツンと立って呟いていた。

「絶対パクリじゃん」

それは自分の能力について。ラノベマニアではなく、友達から面白いといわれて貸してもらった本の登場人物が、確かこれに似たような能力を持っていた。

確かに、茶髪少女は某登場人物と似通っているところがあった。誰に対しても勝ち気で、たいていはズボンで行動し、制服のスカートの下には短パンを着用。違うところは年齢が十六歳ということか。「ていうか、ここまで受け入れている自分が怖いわね……」

先ほどまでこの少女、かみじょう みずき リアルワールド上条瑞希もこの世界に来てからは絶望に打ちひしがれていたが、冷静に考えてみれば、どうというほどでもなかった。

桃色のスライド式携帯をスカートのポケットの中に入れ、あたりを見回す。

「村か町って言っても、地図もないんじゃないしなあ。

……適当に行くしかないか」

とりあえず、森のほうへ。理由は、なんとなく面白そうなのがあるからだ。

イマジンブレイカー

「……まさか幻想殺しなんてないわよね」

そうつぶやき、歩いて行った。

「ちよっ……！　なんでこんなことになるのよ！」

ただ今瑞希、爆走中。

何が起こっているかというと、十頭ほどの狼のような魔獣に追いかけられているのだ。

「うう、こうなったらやけくそよ！」

運動神経がすこぶるいい彼女は、走りながらも器用に地面に転がっている石を拾うことができる。そして、その石を握りしめ、
「どうにでも、なりなさい！」

投擲。投げられた石は膨大な量の雷で包まれ、そして――

——アアアアアン！！

一番近くに迫ってきていた狼にあたり、爆発にも似た豪雷が発生する。

「きゃっ！」

その威力で直撃した狼はおろか、その原因である瑞希も吹き飛ばされた。

見れば、大きなクレーターのようなものができて、狼の死体らしきものはない。

それでもまだ、その後ろに控えていたオオカミが三匹ほど。対して瑞希は、自らが発した威力に腰を抜かして立てないでいる。

「はぁ……死人第一号か……せめて、恋人くらいはしかったなあ」
自分が逃げられないことを悟り、能力を再び使おうともせずに、今まで一番ほしかったものとともに自嘲気味につぶやいた。

「GO！ クウ！」

「まかせて！」

瞬間、眼前まで迫っていたオオカミが吹き飛んだ。聞こえてきた声とともに、何かに。

「……へっ？」

目を丸に開く。狼を吹き飛ばしたのは、大きなオオカミだったから。

狼たちが吹き飛ばされたとともに、瑞希の前に誰かが着地する。

「っと。大丈夫か……って、瑞希じゃないか！」

「へあっ！？」

名前も知らないはずなのに、自分の名前を呼ばれて驚く瑞希。だ

が、冷静になってよく見てみると、その人物は瑞希が通う高校の制服だった。

そして、見上げてみると、瑞希が最も慕う二年の先輩、桜野刹那がいた。

まさか刹那も、こんなに早く知り合いに会えるとは思わなかった。上条瑞希は、中学からの後輩である。最初のほうは突っかってばかりで、ため口だったのだが――今もそうだが――、最近では口調が柔らかくなってきている（刹那にだけ）。

昨日もゲーセンなどに行って遊んだ仲なのに、それでも刹那は、ずいぶんと久しぶりのような気がした。

「さっきの雷はお前か？」

「そ、そうよ」

クレーターを横目に聞くと、案の上の答えが返ってきた。

瑞希は腰を抜かしているのか、先ほどから立ち上がるうとする気配がない。

「立てるか？」

「ちよ、ちよつと無理……」

恥ずかしいのか、瑞希は頬を染める。

可愛いと思うが、そんな悠長のことを考えている暇はないと判断し、倒れている瑞希のひざ裏と背中 hands をまわして抱っこする。

いわゆる、お姫様だっこだ。

「えっ！？ な、なにすんの！」

「ごめんな。これしかないん、だ！」

クウが二匹相手している間に、一匹が襲いかかってきた。刹那は

瑞希を落とさないよう、ぎゅっと抱きしめて後ろに跳ぶ。

狼と改めて対峙する。威嚇しているその眼は、狩人のそれ。

刹那は狩られる恐怖を感じるが、それ以上に瑞希を守ってやるという気持ちが強いいため、逃げ出すことはなかった。

「……」

クウの背中を考えていた。自分の能力の有効な使い方について。言葉やイメージで何でもできるというならば、それは魔法と大して変わらない。そして考えた。

魔法の中には一生自分に対して持続できるやつもあるのではないかと。つまりは、刹那が能力を使うに当たって、スムーズに行えることはできないのか。

そして今わかった。解決方法は、身体能力を極限にまで伸ばすこと。

刹那の身体能力は、すでに常人のそれを軽く上回っているのだが、魔獣には効くことが少ない。

だから、身体能力だけでも魔獣に追いつき、あとは頭の回転の早さで勝負。スムーズとはいえないかもしれないが、それが手っ取り早い方法。

長いにらみ合い。だが、それはすぐに破られた。

狼の突進。瑞希を抱いている刹那に、それをよけることはほぼ不可能。

しかし――

アーススパイク
「大地の突起」

バックステップとともに、刹那が元いた位置に、巨大な岩の棘が生える。

それは狼を突き刺しはしなかった。が、突然現れた岩の棘になす

すべもなく突撃する。

「あちゃあ……イタイ」

自分でやったことなのだが、岩が崩れるほど見事に激突した狼に同情してしまう。

それでもやらなきゃやられる世界。

自分でも冷酷だと思えるほど、言葉を紡いだ。

「ヴァースト
爆発」

爆弾などに比べればとても小規模な爆発だが、それでも地面を揺るがすほど。

腕の中で驚いた瑞希が可愛い悲鳴を上げていた。

煙が風によって晴らされた時、狼の姿はどこにもなかった。

「ご主人様……さっきの驚いたよお」

いつの間にか九尾になったクウは、狼らしくない弱りきった声を出した。

「な、ななな……」

いつまでも抱っこしては失礼ということで、降ろされた瑞希は抱っこされていた余韻に浸っていた。

なのだが、しゃべる狼ことクウをみるなり、驚きで口をパクパクし始めた。そして――、

「なんでしゃべっての、なんでなんか仲よさそうなの、て言うかご主人様って何よ!？」

抱きつく勢いで刹那の胸ぐらをつかみ、矢継ぎ早に問う。というか叫ぶ。

「うがつ……お、落ち着け瑞希! こいつはクウだ! お前が拾ってきて俺が飼っているシベリアンハスキーのクウだ!」

「えっ……クウちゃんなの!? この狼が?」

「ああ、そうだ。だから、いい加減放してくれ。息が……」

「へっ？ きゃっ、ごめんなさい！」

放す瑞希、崩れる刹那。クウは狼姿のままで、頭をこすりつけて「大丈夫？」と聞いている。

「いくらミーちゃんでも、ご主人様に何かしたら許さないんだから！」

「ご、ごめん。……なんでいるの？ これって、人間だけじゃなかったの？」

「わかんねえんだ。気が付いたらクウと俺が、あの森の中で倒れてて……。そういうお前はとうしたんだ？ 仲良し三人組が解散か？」

仲良し三人組というのは、上条瑞希、中本香苗、なかもと かなえ しもやなぎしいな下柳椎奈の三人のことだ。ほとんど三人で行動し、しかも全員が美少女なので、刹那の学園の風物詩ともいえる存在だ。

「私は、その、あんたの家に遊びに行こうとしたら、こうなったのよ」

「そっかー。そりゃ災難だな」

「あんたも人のこと言えないでしょ。……それと、ありがと。助けてくれて」

「ん。困った時はおたがいさまさ」

お礼を言われて恥ずかしくなった刹那は、そっぱを向いて頬をかく。

二人の間には、桃色の雰囲気が流れていったが、

「ミーちゃんはいちやいぢやしすぎ！ 今度は私の番！」

白いワンピースを着た犬耳犬の尻尾装備の人間姿になったクウは、雰囲気など気にせず刹那に飛びつく。

「なんで人間になってんのよ！」

クウの能力の説明や刹那のも含め、お互いのことを話していると、いつの間にか夜になっていった。

「ねえ刹那？」

「なんだ？」

「その、能力のことだけど、あんまり言わないほうがいいんじゃない？」

草原でのたき火は危険だということで、刹那が作った熱を発する球体で代用していた。

寒くなつたのか、寄り添ってくる瑞希とクウ。が、寄り添っても温まらないので、刹那がまた能力で毛布を作り、三人でそれをかぶっていた矢先の話である。

「なんでだ？」

「だって、なんでもありな能力つて、もう反則的じゃん。だからさ、それを利用して自分にいいようにしようとする人なんて、絶対いるよ」

「ああ、そつか。そこらへん考えなきゃいけないのか」

瑞希の言うとおりだ。欲深い人間など、金や富のためには何をしても手に入れてやるというのが多い。そうでなくとも、リアルワールドという箱庭に閉じ込められているのだ。この能力がほしいのは違いない。

「いいじゃない。あんたには剣術があるんだし」

最初に一緒に毛布に入ることには抵抗していた瑞希が、ホクホク顔で刹那に寄り添いながら言うてくる。

刹那も、それに同意する。何のためと聞かれても答えられなかった剣術が、まさかこんなところで役に立つとは思わなかった。

「ま、ばれたらばれたで、なんとかなるしな」

当たって砕ける方式で生きている刹那は、それほど気にしない。

普段はそうでもないが、今は絶対的な自信があるのだ。言霊という能力のおかげで。

「さて。そろそろ寝るか」

瑞希とすでに寝てしまったクウを引っ張り、腕枕をしてやる。

「ちよっ、な、何してんのよ!」

暗闇の中でわからないが、おそらく顔を赤くして起こる瑞希。だが、言葉のわりにはちゃっかり刹那の腕のお世話になっている。

「仕方ないだろ? 女の子がこんなところで寝るんだ。少しでも楽なほうがいいだろ?」

「ならあんたが枕作ればいいじゃない」

「俺をどこの製造販売機だと……瞬間的に魔法みたいなことをするのは簡単なんだが、毛布とかさっき作ったあの球だとか、ああいう持続させるものを作るのはちよっと疲れるんだ。あの二つを作っただけでやっと」

その言葉で納得したのかしてないのか、フン、と鼻を鳴らして背中を向けた。腕から頭を離さずに。

素直じゃない瑞希に苦笑し、刹那は目を閉じて眠り始めた。

第二話 能力（後書き）

ども。どうでしたでしょうか？

主要登場人物があともう少し出そろいます。

次話も、頑張って書きますので、よろしくお願いします。

宣伝：『竜と世界と最強夫婦』もしよかったら読んでください。

第三話 はじまり（前書き）

ども、コウです。

なんか、タイトルがいまさら？　みたいな感じですけど、それはいろいろな意味も含めてですので、あしからず。

ということ、まだまだ話数が少ないですが頑張りますので、読んで行ってください。

第三話 はじまり

「始まりの町？」

翌日。刹那、瑞希、クウの三人は、近くにあった丘に来ていた。

「ああ。第一層にある大きな町が大体そうらしいぞ」

昨夜使った毛布をコートへと作り変え、九尾の狼となったクウにまたがり、刹那と瑞希で一緒にくるまっている。

「てか、そんなら昨日のうちに知らせときゃいいのに」

桃色の携帯をいじりながら、瑞希は刹那を背もたれにして文句を垂れる。

意外と瑞希に甘い刹那は、目の前にある頭を撫でながら、

「んまあ、適当なんだろ。神ってのは。なんせ、俺に神のランクを付けるぐらいだからな」

「……そうかもね。じゃあ、私の巫女のランクは、刹那に仕えろ、って意味かな？」

何の心変りがあったのか、瑞希にしてはかわいらしい言い方だ。ということ言えば、瑞希に百パーセントの確率で殴られるので言わない刹那。

「さあな。……それはともかく、多分あれも——」

「始まりの町、ってわけね。……私が仕えたいのに」

比較的高い丘の下には、大きなクモの巣のような街並みが広がっていた。

「うわっ……多いな、人」

「そ、そうね……」

「わう……ご主人様あ……」

クウは、大きな狼姿は目立つということで、小さな犬の姿になって刹那の頭に乗っていた。

安全なはずの刹那の頭の上でクウがうなだれているわけは、丘を下ったすぐ近くにある門をくぐり、その通りの人の多さからだった。どこかわからないが制服姿の学生に、刑務所から逃げ出してきたような囚人、スキンヘッドのヤクザなど、見ただけで様々な職種の人がいる。もちろん、日本人だけでなく外国人も。

「瑞希、しばらくローブの中に入ってる。何が起こるかわからんから」

「うん……」

実は男性恐怖症の瑞希は、なぜか刹那を除いて、男に近づくことを極端に嫌う。

見たところ、女性がいけないことはないが、比較的男が多い。それを考慮しての、刹那の気遣いであった。

ツンデレの本性を忘れず、嫌々刹那のローブの中に入っているように見えるが、実はうれしい瑞希。

「やっぱパニック状態だな……」

刹那や瑞希のように、すぐこの現状を受け入れられるという人は、ごくわずかなようだ。こうして、この大きな通りを歩いていると、そこここでトラブル（主に殴り合いのケンカ）が起きている。

落ちて着いているように見えていても、せわしなく視線を動かして拳動不審、という人も多い。

「刹那……これからどうするの？」

「正直、どうしようもないな。宿かなんかで、人工頭脳を持ったロボットみたいなのがいると別なんだが……」

そもそもがお金がない。あるとしても、円・ドル・ユーロ……。いろんな国の人が混ざり合っているこの状況では、使えそうもない金儲けにしても、それでは意味がなく、やろうと思う人はまずいない。その前に、現実が理解できていない人のほうが多いのだから。」「ん？ ……あれ、宿、って書いてあるよな？」

今歩いているところから、それほど遠くない場所に、『宿』と堂々と書かれた看板が突き出ていた。

「うん……行くの？」

「ああ。とりあえず動かないと。待っていても何も起こらないからな」

それでもまだ、ローブの中で刹那の腕に抱きつく瑞希の不安は取り除けなかったようで、

「心配すんな。俺がいるんだから」

残った片方の手で撫でてやり、宿と書かれてある看板の建物へと向かった。

——心配すんな、俺がいるから

それは、瑞希にとって希望の言葉であった。

瑞希は、中学の時にある一人の男子生徒からいじめを受けていた。生まれてから根っからの男性恐怖症の瑞希にはつらいものだったが、それは半年もたたないうちに、ほかでもない桜野刹那によって終止符を打たれた。

その時言われた言葉が、今も瑞希の胸にしみているのだ。

だから、瑞希は刹那を最も信頼しているのである。

瑞希は、ローブの中で刹那の腕にしがみついて、なるべく人に振れないように意識しながら歩いて行った。

古めかしい木の扉を、刹那が押すと嫌な音を立てながら開いていく。

「ん？……だれも、いない？」

瑞希もローブから顔を出してみれば、中には人っ子ひとりいない。

ローブの中から出て、室内を見回す。

内装は、いかにもRPGに出てきそうな居酒屋。床も壁も、木目の整った木で覆われていて、とてもあの古い扉からは考えられない真新しさだ。

「あ、なんかあるよ？」

「これは……液晶のモニター？」

カウンターのちょうど真ん中あたりに、まったくこの内装に似合っていない、現代的な液晶のモニターが埋め込まれてあった。

まだ何も表示されていない、真っ黒な画面だったが、瑞希が興味半分に手を近づけると、ブンと音を立てて画面が明るくなる。

「つと、いきなりだとビビるな……手をかざせ？」

瑞希も見ると、モニターには人の手が描かれてある真ん中に、『手をかざせ』と表示されてあった。

瑞希も刹那も、疑問符を浮かべるが、やってみないとわからないと刹那が手をかざす。

すると、

『登録完了シマシタ。コノ手形情報ハ、コレカラ先宿デ泊マレルヨウ、各宿ニ送信サレマス。ご利用ノ際ニハ、手ヲカザスダケデ泊マレルヨウニナリマス』

機械音が事細かに説明をしてくれた。

「おお、これは……なんというか……」

「すっごい現代的ね……全然合ってないし」

やはり瑞希は思うのだ。このような内装をしているのだから、もっとそれに合うようなシステムを作ればいいのにと。

ともかく瑞希も刹那と同じように手をかざしてみると、先ほどとまったく同じ説明がされた。

「これで、ここに泊まれるのかな？」

「とりあえず、あそこの階段で二階に上がってみようか」

右端の一番奥の階段から二人は二階へと上がっていった。

二階に上がってみると、廊下の横端にずらりと部屋が並んでいた。適当に、二人は近くにあった部屋に入ろうとすると、ドアの横、刹那の目線あたりに先ほどのモニターに出ていた手形の絵と、暗証番号を入力するような数字のキーボードを見つけた。

「これ……かざせてことだよな？」

おそらくそうだが、合っているという絶対の確信がないので瑞希に聞いてみる。

瑞希もそう思ったらしく、うなづくことで同意。

左手を手の絵にかざすと、

『宿泊人数ヲ入力クダサイ』

もう驚かない。冷静に考え、数字のキーボードに入力することが分かるが、

「別々に泊まるか？」

最大の難関にあたった。

「別に」

と思ったのだが、意外と簡単に答えられた。

「別に、って……仮にも男女だぞ？」

「仮にもってどういう意味よ。いいじゃない、別に。前にだってあなたの家に泊まったことあるし。男と女だからって……私には関係ないの」

言い終えると瑞希は、キーボードの『2』のところを押す。と、

——ガコン

何か、部屋の中で音がした。

何かがあつたのかと思い、刹那はドアを開けて見ると、

「すげえ……広い」

ベッドが二つに、高級そうな棚やら机やら。必要最低限のものしかないのだが、その分部屋が広く見え、かつ高級感にあふれている。はじめの一步を踏み出したのは、刹那でも瑞希でもなく、刹那の頭の上でじつと静かにしていたクウであつた。

ぴょん、と飛び降り、軽い音を立てて煙を出し、

「ご主人様〜！」

擬人化してから刹那に飛びついた。

なんとなく予想していた刹那は、体勢を崩すことなくその小柄なクウを受け止める。その時、瑞希からの死線は気にしない方針へ。

「ご主人様ご主人様ご主人様ご主人様ご主人様あ〜！！」

耳をパタパタ、しっぽをフリフリ、顔をすりすり。犬の行動三連発を繰り返す。そんなクウの行動に癒されながら、刹那は頭をクシヤクシヤと撫でてやった。

「わう〜……」

耳の裏を搔いてやると気持ち良さそうに体を預けてくる。

犬の時と変わらないなあ、などと思いながら、刹那はクウを抱っこしベッドに移動。正面から抱くようにクウを膝の上に置いて、瑞希のほうへ体を向かせた。

「で、これからどうする？」

「……そういやあんた、動物好きだったわね」

「ん？ そうだが？」

「ま、そこで少し安心したけど。で、どうするかよね？」

ふわふわとしっぽを揺らし刹那の膝の上で嬉しそうにしているクウに、嫉妬の視線を送るのをやめず、これからを考える。

「……どうにもできないわね。混乱が収まらないと、何をするにも始まらないし」

「だよなあ……あの様子じゃ、二・三日はかかるよな……」

ことが起きたのが昨日で、おそらくあのざわつき方だと、誰もが一睡もせずに騒いでいたに違いない。それが、道端で寝ていたか。

ともかく、正常な判断をできる人が少ない今、この宿から出るのは得策ではない。

「となると、ひまになるよな……」

「私も。外に出れないんじゃないや、超電磁砲レールガンの制御の練習もできないし」

「私はご主人様がいればどうでも……」

はあ……、と憂鬱になる一同（クウ以外）。

それから数分。瑞希も刹那の横のベッドに寝転がり、携帯をいじくっている。

「能力、か……」

刹那はクウを抱えてベッドに寝込みながら、自分の能力をどうするか悩んでいた。

刹那の本当の能力の偽装として考えているのは、瑞希が扱うような、魔法と何ら変わらない能力。

「ねえ」

「なんだ？」

「能力をどうするか悩んでんでしょ？」

「そうだが？」

「じゃあ、さ！」

ベッドのスプリングの力を借りて起き上がる瑞希。そして刹那の

ベッドに飛び移り、クウの頭を撫でながら、

「私と同じ能力にしてよ！ そんなチートな能力なんだから超電磁砲^{ガン}をパクるなんて簡単でしょ？」

「そりゃいいが、なんでだ？」

「私に制御の仕方を教えられるでしょ？ それに……………おそろいだし」

「なんで上から目線なんだよ。つか、それに、なんだ？」

「っ！ なんでもないわよ！」

後から付け加えるように言った言葉が気になる刹那だが、一応瑞希の言葉を信じて聞くのをやめる。

いつの間にか眠ってしまったクウをそつとどかして起き上がり、刹那は部屋の真ん中あたりに立った。

「言霊つてぐらいだから、自分に暗示でもかけりゃ瑞希のになるか？」

基本、なんでもありな言霊は自分をだますことでその能力を使う、と思い刹那は目を閉じて自分に暗示をかける言葉を探す。

そして、頭にパツと浮かんだ。

「^{フェイク}偽装する」

何を思い浮かべればいいのかわからないが、とりあえず当の本人である瑞希を思い浮かべる。

そして、

「^{フォルス・レールガン}偽・超電磁砲」

雷に包まれた。

奔る電撃にびっくりして起きるクウ、無意識に雷の盾を展開して自分とクウを守る瑞希。

「ちよつと！ なにすんのよ！」

何の予告もなしに、実験的に始めた刹那に瑞希は怒鳴る。

だが刹那は、雷に包まれた体を見ていて、その怒鳴り声は聞こえていない。

瑞希もそう怒っているわけではないので、びっくりして泣き出したクウをあやしなから刹那の行動を見守る。

「いやあ……チートって、改めて卑怯だってことがわかったな」

「何ブツブツ言ってるのよ？」

「ん？ ああ、なんか、超電磁砲レールガンのすべてがわかった気がした」

まとった雷を払って収め、刹那は謝罪の意味を込めてクウを撫でる。

やはり主のほうがいいのか、刹那に飛びつくクウ。

「そつ。じゃあ、私に教えなさいよ」

「また上から目線に……まあいいか。でも少し待ってくれ。これを解除できるかやってみたいんだ」

リウオーク
「解除」

すると、先ほどのモニター音と同じように、ブンと音を立てて雷が刹那の中から飛び出て消え去った。

「問題ないみたいだな」

呟くと、また先ほどと同じように雷をまとめて偽装する。

「よし。じゃあ、制御のほうは外でやらないとだめだから、とりあえずこの超電磁砲レールガンができることから教えるな」

そうして、刹那による瑞希への能力講座が始った。

「あつ……なんで、こんなことにい」

ある草原にて。一人の少女が地面に手をついて、四つん這いの形で落ち込んでいた。

リアルワールド

「この世界のことと衝撃的だったけど、こっちも衝撃的ね」

「私的には、こっちのほうが驚きですけど……」

その少女に憐れみの視線を送る、二人の少女。

「た、他人事みたいに言わないでよお」

うるんだ眼で落ち込んでいる少女は睨むが、いかんせん覇気も何もない。

「いや、他人事だし」

「そうですよ。それに、落ち込んでいてもはじまらないですよ？
なんせあなたは——」

飄々とした態度でかわす少女に、敬語で落ち込んでいる少女を慰めようとする少女。

いや、慰めようとしているのではなく、これは——

「性転換してしまったのですから」

明らかに楽しんでいた。現実を再度付きつけるところを見ると、かなり。

くすくすと手で口元を覆いながら上品に笑う少女の姿は、性転換してしまった少女にとって悪魔にしか見えなかった。

「まあまあ、薫君——いや、かおりん、かな？　しいちゃんの言うとおりだよ。なんたって——」

その少女——中本香苗は、さきほどの少女、下柳椎奈とおなじようにくすくすと笑いながら、

「せつつんが好きなんだもんね？」

やはり楽しんでいた。ただこれは、親友の恋を見守るかのよう。というよりも、これはまぎれもない事実。性転換少女、否、橋本薫はせつつん——桜野刹那にまぎれもなく恋をしていたのだから。凶星というか、もはや周知の事実になっていることを言われて、薫はボン、と顔を爆発させた。

「恥ずかしがることないじゃん。本当なんだしさ」

「そうですよ。恋愛には、男も女も関係ないですよ？」

二人は薫に歩み寄り、頭を撫でたり背中を撫でたりして慰める。慰められ続けること数分。ようやく通常状態になった薫は、二人の手を借りながら立ち上がる。

「うう……女の子になったのは認めるよ。でも、なんでだろ？」

「神様の仕業じゃない？ せつつん大好きっ子のかおりんにプレゼント、って」

「こんなプレゼントいらないよお」

「あらあら。受け取れるものはすべて受け取っておかないと。そうでなければ、損しますよ？」

それでもまだうじうじ言う薫に、椎奈は終止符を打った。

三人は、ひとまず近くに見えた川に行き、ちょうどいい岩を椅子にして座っていた。

「そういえば、二人とも能力なんだったの？」

薫がいじけて川に石を投げ込んでいるのを見ながら、香苗はそう切り出した。

「あら。まずは自分から言うべきでは？」

「んー、それもそうね。私の能力は、『^{インフェルノ}業火』。魔法の炎みたいになればーんってやる能力だよ」

腕全体でバツ、と広げて炎の表現をする香苗。

「それは面白そうな能力ですね。私は二重覚醒と言って、二つの能力があるんです」

「ええ〜！ いいなあ」

「ふふつ。一つ目は『空間跳躍』^{ホールアウト}。瞬間移動みたいなものです。それで二つ目が『加速』^{アクセラレイト}。足が速くなる、といった感じですかね」

説明し終わっても、いいな〜いいな〜、と騒いでいる香苗を無視し、椎奈はいじけているブレザー（男用）少女に目を向ける。

「薫さんはどうなんですか？」

「……僕は『能力封鎖』^{スキルブレイク}だよ」

「もしかして、某幸薄少年のあれ！？」

今まで騒いでいた香苗が、いきなり身を出して薫に問い詰める。

薫は少し高い岩に乗っていたために、バランスを崩して川に落ちそうになる。それをなんとか、薫自身がバランスをとって難を逃れる。

「たぶん、香苗ちゃんが考えているので合ってると思うよ」

「ええ〜！！ いいないなあ！ 私だけ、なんかこう、普通じゃん！」

先ほども騒ぎだした香苗。

「普通が一番ですよ？ 刹那さんもそう言ってたじゃないですか」

「そういうせっつんも普通じゃないの！ 剣道めちやくちや強いし。というか、私たちと一コしか変わらないのに剣道師範ってどういうこと！？」

騒ぎ出した上に、キーキー言い出した。こうなった香苗はかなり厄介ということ、長年の幼馴染である椎奈は知っているので放っ

ておく。

「そういえば、刹那さんもこの世界に来ているんでしょうか？ それと、瑞希も」

「うーん……セツ君は巻き込まれ体質だから、いるかも。みいちゃん……も、あんまり変わんないからいるかも」

自他共に認める巻き込まれ体質な刹那は簡単に予想できる。そして、瑞希も意外と事件に絡まれやすいことから同じように予想できた。

「とりあえず、あのお二人を探すことにしましょう。そうすれば、どうにかなるかもしれませんから」

「そうだね。セツ君、頼りになるから。みいちゃんもだけど」

これで、三人のこれからの行動はまず決まった。

香苗が落ち着いたところに、三人は刹那と瑞希を見つける旅に出た。

第三話 はじまり（後書き）

ども。最後らへん、かなり新キャラが出てきました。といっても三人ですが。しばらく、刹那・瑞希・クウと香苗・椎奈・薫の三人組は崩さない予定なので。

次話の予告ですが、香苗・椎奈・薫の三人組視点で行きます。たぶん、新たなキャラも。

おそらく恒例となった宣伝を。僕が最初に手掛けた主人公最強ファンタジー、『竜と世界と最強夫婦』もよろしく願います。

では、これからもよろしく願います。

第四話 仮の世界（前書き）

ども、コウです。

タイトルがなんか重苦しいですけど、あんまり意味はないです。最後のほうにちらりと出るだけで。タイトルが思いつかなかったんです。

それでは、本編をお楽しみください。

第四話 仮の世界

「ていうか、能力つて、ホント便利ねえ」

あの平原で一夜を過ごし、たまたま近くにあった始まりの町に三人は来ていた。

閑散としている町の様子になど目にもくれず、適当に見つけた宿に入り込み、宿の手続きを終えて部屋で休んでいる。

そんな、息をついた中での香苗の第一声だった。

「まあ、そうですね。ていうか、攻撃性でいえば香苗が一番強いのでは？」

この街に来る前、三人は自らの能力を試してみたのだ。

「あ、あはは……まさかあんなことになるとは……」

香苗が苦笑いしている理由は、その能力にあった。
インフェルノ

業火という名前からして普通ではないが、やはり二重覚醒の椎奈や能力無視の薫とは劣っていると思っていた。

だがとんでもない。それを凌駕するほどの威力があったのだ。

すこし、香苗が力を込めただけで、目の前があつという間に焼け野原になったのだから。

「それを言えば、かおりんのほうがすごいじゃん」

薫も薫で、被害がきそうになった時、無意識なのか能力封鎖を發動し、その炎を消し去った。跡形もなく。
スキルブレイク

「え？ あれはほんとに無意識だったし、すごいうちに入らないんじゃない……それに、椎奈のほうもすごかったよ」

まるつきり女の子の声になってしまったという事実には、薫は打ちのめされそうになるが何とかこらえてそう聞く。

「私も、あれは意外でした……」

香苗が放った炎のせいだ、わらわらとおかしな生き物たちが寄ってきてしまったのだ。だが、その時、以外に一番運動神経がいい椎奈が、薫と香苗を抱えて逃げた。

その時に加速が發動し、ものの数秒でおかしな生き物——おそらく魔獣が見えなくなったのだ。

「でも、椎奈のあれ……なんだっけ？」
ホールアウト
「空間跳躍ですか？」

「うん、それぞれ。それだけが發動しなかったよね？」

「何か条件があるんじゃないですか？ 特別そうな名前だし」

「へえ……見てみたいな」

「また今度ですね」

「……………」
「……………」
「……………」

そこでいったん話が途切れた。

「ひいゝまあゝ！」

ボフィン、とベッドに倒れこみ、足をばたつかせて叫ぶ香苗。
しかし、今何が起こるかわからないこの状況で、外を出歩くのは

得策ではないと判断したのでどうしようもない。

「じゃあ暇つぶしに何かしますか？」

さすがに何もないので暇と感じてきたのか、椎奈がそう提案する。
「なにすんの？ 携帯アプリなんて通信制じゃないし」

香苗は、ん、とうなりながら赤いストレート式の携帯をいじく
る。

椎奈もそれを聞いてうなり、自分の折りたたみ式の白い携帯で何
かないか探している。

薫は、ひそかにお気に入りの、刹那と同じ機種の青い携帯をいじ
りながら、時々刹那とやっていたことを思い出す。

「しりとりはどうか？」

二人は携帯から目を離して薫のほうへ向く。

「いいかも。最近やってないし」

「じゃあそれで決まりですね。じゃんけんで順番を決めましょう」
ということ、三人のしりとり対決が始まった。

逢魔が時。日が沈みかけるころ、それはやってくる。意味として
は、妖怪や幽霊に会いそう時間、だが実際にそういうことはなく、
単なる言葉としてつかわれる。

しかし、この非現実的世界では、その言葉が本当のものとなりう
ることもあるのだ。

「ら、ら、ら、……ライオン！ ……キング」

「あらら？ さっきのはアウトではないですか？」

「やだなあ、それはいいちゃんの聞き間違いだよ」

「ふふつ。では、グーグル、ですね」

「ええつ、るうー！？ る、る、る……ルパン三世！」

「ぶぶ〜！ それいつちやたよお」

「また薫さんの負けですね」

「うつ、うつ……」

信じられないことに、三人は夕方になるこの時間までしりとりを続けていた。ちなみに、総数でいえば五十回。そのうち四十四回が薫の負けになっている。

そして、その楽しいときに、それがきた。

——ゴオン、ゴオン、ゴオン

「ん？ なんだろ？」

「鐘の音、ですかね？」

「わっ、外がいつの間にか真っ暗」

響く鐘の音。三人が窓から外を見てみると、空が暗い。いや、黒い。

「てかまだ六時じゃん。なんでこんなに——」
と、

——ファアアアア！

叫び声とも風の音ともつかない、変な音。

そしてそれと同時に、街中が恐怖の悲鳴に包まれた。

「何が起こつてるの！」

三人とも、窓を開け放ち、身を乗り出して様子を見る。

目を細めるなか、見えたものは、

「何あれ！？ 黒い……熊！？」

よくわからない、黒い瘴気を渦状に纏っている熊のような生物。

距離があるから大きさは分らないが、その瘴気だけは異常だとい
うのがわかる。

「ともかく二人とも、行ってみましょう！」

正義感の強い三人のこと。すぐに宿を出て見えた怪物の方向へ向
かう。

怪物と、その黒い瘴気に襲われている人が見え、

「う、うわあああああああ！！！」

悲鳴が聞こえた途端、薫の頭の中には能力封鎖スキルブレイクの使い方が浮かん
できた。

「危ない！」

走る中、薫は手を悲鳴をあげた人へと向かせ、力を込める。
すると、悲鳴を上げた男の人を包み込むように、気泡のようなも
のが現れた。

そして瘴気が当たる寸前、それは気泡によって音もなく霧散。

「へっ？」

男の人のまぬけな声。だがそれをかき消すように、

「どいてないさい！」

香苗の叱咤がとどろく。あわてて男の人が退き、三人はそこから
迷いもなく化け物に突っ込んでいく。

——ファアア！

喉の奥からすりだすような、そんな掠れた叫び声とともに、化け熊は瘴気を球の塊にして飛ばしてくる。

が、それは、薫が手を出すことによって、掻き消される。

「はぁ！」

香苗の掛け声。と、ともに、襲いかかる業火。

紅蓮のそれは、空气中に広がる酸素により燃え上がり、化け熊を飲み込もうとするが――

――クア！

先ほどまでとは違った、鶏が驚いたような声を出し、黒い瘴気を前方に展開させて炎を止める。

「なら！」

薫は、スキルブレイク能力封鎖の能力で、瘴気の壁に穴をあける。

そこから、凝縮された炎が一気になだれ込む。

――ブア……

黒い瘴気と紅蓮の炎。その二つが晴れた時、三メートル強はある巨体がよろめいていた。

「香苗、これに！」

先ほどから何もしていなかった椎奈の前には、黒い穴があった。意味がわからなくなる薫と香苗の二人だが、椎奈が指さした先にあるものに納得する。

香苗は、それに向かって業火を放つ。

黒い穴はそれをすべて飲み込み、いまにも襲いかかってきそうな化け熊の後ろにある、同じ黒い穴から炎を吐きだした。

予想外のところから襲いかかってきた炎に、化け熊はなすすべもなく飲み込まれ、三人は薫が展開した気泡の能力封鎖——スキルブレイク虚無空間ホロウワールドで守られている。

炎が晴れたところには、化け熊は灰の塊となっていた。

「なんか、わけわからないうちにやったけど、なんだったんだろ？」

「さあ？ でも、香苗も能力の使い方が浮かんできたんですか？」

「あつ、それ僕もだよ」

灰となった化け熊を見ながら、三人が話していると、

「な、なあ……」

三人が声がした後ろを見ると、先ほど助けた男の人がいた。

よく見れば、その制服は薫が来ているものと同じ。それに気付いたのは薫で、あつ、という声とともに、

「君は……大沢君？」

「知ってんの？ かおりん」

「うん。僕のクラスの委員長……」

「あ……つと、確かに俺は大沢だが、君は？ うちのクラスにいなかったと思うけどな」

わからなくなるのは当たり前だ。第一が女顔である薫は、女に磨きがかかっている。これだけならまだしも、綺麗な黒髪は肩より下までに長くなり、出るところは出、引つ込むところは引つ込んでいるのだから、わかりにくい。

大沢という男に聞かれた薫は、顔を赤くしてうつむき、

「えと、信じられないかもしれないけど、橋本薫、だよ」

「はっ……？ え、ええっ？」

「ああ……ほらほら、大沢君。ここじゃ騒ぎの中心だから、ひとまず私たちが止まってる宿に」

驚いている大沢を、香苗は引つ張る。香苗の言った通り、襲われた人たちが先ほどの惨状を見て、わらわらと集まってきている。

そして、椎奈はにっこりと笑い、

「では、行きますか」

大沢はまぬけな顔のまま、そこから三人とともに消えた。

「じゃ、とりあえず自己紹介からね。私は、銀河学院の高等部一年の、中本香苗よ」

瞬間移動で戻った四人はひとまず大沢に自己紹介をしていた。

「同じく一年の下柳椎奈です」

「橋本薫だよ」

大沢は香苗と椎名の名前を聞いて驚いている。

「まさか、こんなところで三大美人の二人に会うなんて……」

「ほらほら。次は君だよ？」

「あ、ああ、すまない。俺は大沢健吾だ。薫と同じクラスだ」

そして、健吾は薫のほうへ向け、

「さっきの続きだが、君は本当に薫なのか？ 確かに、似てはいるが」

まじまじと見る。

中身までも女の子になってしまったのか、薫は恥ずかしそうに香苗の後ろへとそそくさと移動する。

「ええ。この子は本当に、せっつん大好きっ子のかおりんよ」

香苗は小動物的な行動の薫を可愛く思うのか、薫の頭を撫で、その制服のポケットに手をつ突っ込んで青い携帯を盗る。

「ほら。待ち受けがせっつん。これでもまだ信じられない？」

パカリと折りたたみ式のその形態を開き、待ち受けを見せる。
薫は、いつの間にか刹那が大好きということで知られていた。…

…唯一、その手の情報に疎い刹那が知ることはなかったが。

ガチホモ、とからかわれることはなかった薫の想いは、まさに校内公認となっていたのだ。

そして、刹那が大好きといえる証拠が、刹那とのツーショットの写真を待ち受けにしている所。

最大の証拠を突きつけられては、健吾としても否定はできなくなる。

「なら、なんで女の子になんかになった？」

「それがわかったら苦労しないよお」

「ああ……そうか」

再び現実を思い出してうなだれる薫。

するとまた、健吾は疑問を口にする。

「瑞希……上条瑞希はどうしたんだ？ あの子いつも一緒だったろう？」

「瑞希は、たいてい部活帰りに刹那さんのところによりますね。今日、というか昨日もそうでしたから、この世界に来ているのなら、刹那さんだと思いますよ」

どこから持ってきたのか、椎奈は部屋の真ん中にあるテーブルに、人数分のティーセットを用意している。

「そうか……前から思っていたんだが、桜野先輩とは、どのような人なのだ？ 入学当初から人気だが……部活にも入っていない、いわゆる帰宅部だろ？」

健吾は話を変え、誰もが知りたがる校内七不思議のひとつ、『刹那の人気の秘密』について聞いてきた。

「んー、やっぱ、人のよさじゃない？ せっつん、面倒な事には関わりたくないくせに、誰かが助けを求めるとすぐ手を伸ばすんだから」

「ふふつ、瑞希を助けた時もそうでしたよね」

紅茶の用意ができた椎奈は、ほかの三人をテーブルへと導く。

「それは瑞希から直接聞いたことがあるが……君たちも、桜野先輩に助けられたことがあるのか？」

「うん！ セツ君には感謝してもしきれないよ」

「ま、私はほんのちよつとしたことだけど」

「私は……かなりお世話になりましたね」

三人とも、特に薫は勢い込んで言う。

「……桜野先輩はいい人なんだな」

柔らかな表情で健吾は笑むと、

「そうだよ！ セツ君は優しくてかつこよくて強くて！ 目立ちたくないから伊達眼鏡してるんだけど、それでも知的でかつこいいていうか！」

小さな拳を作って力説。突然の薫の変化についていけない健吾は、ただ呆然として聞いているしかない。

「こうなつたかおりんは、止められないから」

「私たちも一カ月に一度は経験するんです。辛抱してください。でも、ちゃんと聞いてないと――」

「でね、でね……って聞いている委員長！？ その時のセツ君がまた！」

「なんというか……大変だな、君たちも」

健吾が、知られざる薫の一面を知った瞬間であつた。

話し続けて疲れたのか、薫は自分のベッドで眠っている。

「それで、けんけんの能力って何？」

「……なんだ？ けんけん、って」

「あだ名よ。それで、なんなの？」

友達にはあだ名をつける癖がある香苗は、当たり前よ、という感じで返し、興味津々に聞いている。

「俺のは、フィジカルアップ身体強化。身体能力を限界まで高める能力だ」

「よし、勝った」

「？ 何の話だ？」

「こつちの話。で、これからどうするの？ けんけんは」

ガッツポーズを見せる香苗に、怪訝な表情をして聞く健吾だが、軽くスルーされる。

「どうする、って……俺はギルドを立ち上げてみたいんだ」

「へえ、ギルドを？」

「ああ。俺の知ってる人やクラスメイトを集めて。そうすれば、みんなで力を合わせて、この世界を早く抜かれるかもしれない」

それはおそらく、昨日考えた結果なのだろう。言葉に力がこもっている。

「君たちはどうするんだ？」

「私たちは、瑞希と刹那を探す旅に出たいと思います。できれば、明日か、明後日くらいに」

「……俺も、連れて行ってくれないか？」

「あゝ！ なんとなく予想できた。ギルドに加盟してほしいんですよ」

まるでいたずらっ子が標的を定めたみたいに。そんな声音で香苗が健吾に聞く。

健吾も、それはまんざらでもないのか、苦笑する。

「まあ、それもあるんだが……やはり、仲間はたくさんいたほうがいいしな。それに、三人についていけば、知り合いを見つけられるかもしれない」

健吾の言っていることは、とても的を得ているので、香苗と椎奈の二人は特に否定することもなく、そこで解散することになった。

「ぜつつつたい覗かないでよ！　覗いたら承知しないんだから！」

「おまつ、俺をなんだと思ってやがる！　するわけねえだろ、変態じゃあるまいし！」

「どーだか！　前ん時みたいに覗きに来るでしょ！」

「ばっ、あれはだな！　お前が着替えを置きに来いっていうから！」

「とにかく！　覗きに来ないこと！　いいわね！」

木製の引き戸を乱暴に閉め、浴室の脱衣場へとはいっていった。

「なんだってんだよ……つたく……」

まいった、という表情で刹那はベッドに転がる。

時刻は九時過ぎ。刹那が瑞希に能力の説明をし終えて、かれこれ五時間ぐらいたっている。

その五時間、何をしていたかというと、携帯をいじったり、瑞希と話したり。

その中で、刹那が一番驚いたことが――

「まさか、告白されるなんてなあ」

いきなりのそれだった。本当に、前触れもなく。

『私と付き合いなさい！ 恋人として！』

顔を真っ赤にした姿は、刹那が今までに見たことのない瑞希の姿で、可愛かった。

「……“仮”、ねえ……」

ただ、少し残念なのが、本当の恋人ではないということ。

だがその理由を聞いて、刹那も納得した。

リアルワールド

この世界は空想上の世界が現実化しただけで、本当の世界ではない。
ちぎゅう

だから、たとえこの世界で恋人になっただとしても、それをそのまま地球に帰って持ち越したくないらしい。

要は、本物の世界で、本物の恋人同士になりたいということだ。

回りくどい言い方だったが、刹那はそう解釈する。

「てかお前、よく寝るよな……」

刹那のベッドにくるまって寝ているのは、もちろんクウ。思えば、刹那のそばに来てクウは寝ることが多かった。

「ま、いつか……」

変わらないクウを見て刹那はほほ笑み、携帯を再度いじろうと目を向ける。

「システム、変更……？」

折りたたみのそれを開くと、液晶画面の真ん中に表示されていた。
「とりあえず、『はい』」

というよりも、選択肢が『はい』か『YES』しかないので、どちらでもよかった。

決定ボタンを押して数秒。何も起こらないと思いきや、突然携帯

のバイブが作動し刹那の手の中で震える。

ポーン、という軽い効果音とともに、携帯の画面が浮かび上がった。

「うおっ、なんだこりゃ!？」

まるでそれは、近未来のアニメやゲームに登場してきそうな、3Dデータウィンドウとでもいうのだろうか、それが携帯の画面が数倍になって浮かんできた。

「マジで非常識だな……」

元の携帯の操作部でいじくれば、浮かび上がってきたデータウィンドウももともとと同じように移動する。

「ん？ メニューが増えてる」

メニューボタンを押してみると、十二個あったメニューが十五個に増えている。とはいっても、画面が大きくなった分、窮屈な感じは受けないが。

増えているのは、『地図情報』・『リアルワールド最新情報』・『現在金額』という三項目。

「んじゃ、この地図情報ってのを……」

決定キーを押す。すると、メニュー画面のデータウィンドウに重なるように、この始まりの町らしき地図が載ったデータウィンドウが開かれる。

「へえ……この街は『南の町』っていうのか。始まりの町でも名前があるのな」

そのデータウィンドウを消し、次に『リアルワールド最新情報』のデータウィンドウを開く。

『5月10日：各自の携帯電話がシステム更新されるようになりました』

たったその一行だけだった。

つまんねえ、と刹那はつぶやきながら『現在金額』へ。

「最初に金が給付されて、二万……G^{ガル}? 1G、一円……てことは現在所持金二万円ってことか。……あ、加算された」
画面表示の真ん中に『20000』と書かれたのが、その上に『+30000』と加算され、その真ん中の部分が『50000』に変わった。

「野良狼討伐報酬? ……ああ、あれか」
野良狼、と見てよくわからなかったが、昨日の瑞希を襲っていた狼かと思に至る。

「今、五万円持つてるってことか……金持ちだな」

「なんで覗きに来なかったのよ?」

「うおっ!?!」

ふわりと。シャンプーのいい香りが漂ってきたと思ったら、後ろから突然声を掛けられた。

「なんで覗きに来なかったの」

「な、なんで、って、お前……覗くなって」

「あんた、ツンデレ用語が分かんないの!?!」

「はあ!? 意味わかんねえって!」

「わかりなさい! あんたが来るかと期待してたのに! この馬鹿っ!」

「いやいや! なんでそんな理不尽な!」
「もう知らない!」

不貞寝する瑞希。しかも刹那のベッドに。クウを抱き枕のように抱きしめて。

「うゅ……」

「あの、瑞希さん？　そこ、俺のベッドなんです……」

「……それが？」

先ほどとは一変し、驚くほど静かな声で聞いてくる。

それに対して困る刹那。ぽりぽりと頬を掻き、代わりに瑞希が使っていたベッドに向かう。

と、

「……どっちなんだよ？」

「仮でも、恋人なんだから、一緒に寝なさい」

「ったく……中学ん時と変わんねえな」

フツ、とわらい、刹那は瑞希の後ろにもぐりこむ。

瑞希がいじめを受けていたころ、よくこうして一緒に寝ていたのを思い出しながら、刹那は、強く、優しく、抱きしめる。

「ふん。あの時とは状況が違うの。もっとムラムラしなさい」

「へいへい、それはまた今度な。今日は少し疲れた……」

もそもそと寝がえりを打って、瑞希は刹那の腕の中に納まる。

刹那も、そのやわらかな女体を、再び抱きしめ、ともに眠りについた。

第四話 仮の世界（後書き）

ども。どうでしたでしょうか？ 楽しんでいただけたら幸いです。
途中で出てきたデータウィンドウですがイメージできたでしょうか？
ソードアートオンライン
SAOという小説を読んでいる方なら、メニューウィンドウを思い浮かべればいかと。

では宣伝を。たまにシリアス、たまにギャグ、な主人公最強物語、『竜と世界と最強夫婦』。多分、人気が少しずつ上がっている、僕の第一作もお願いします。

それではこれで。これからもよろしくお願いします。

第五話 戦い（前書き）

ども、コウです。

久しぶりの更新という気がするのは、僕だけでしょうか？ 竜と

世界と最強夫婦ばかりしてたような気がします。

そんなわけで、今話は多分長いです。ほかの話より。

ということで、今回も楽しんでいてください

第五話 戦い

「あんだ、恋人の前でよくも堂々と……」

今、刹那はクウを膝の上に置いて抱きしめている。瑞希はそれを見て嫉妬している、ということだ。

「つつても、クウは別だろ。なんだかんだいって、お前も抱きついでんじゃねえか」

「ふん。背中もいいけど、腕の中は恋人の特権よ」

背中に抱きついて文句を垂れる瑞希に、どうすればいいかと頭を抱える刹那。棘のある口調とは打って変わって、甘えるように背中に顔をこすりつけているからなおさらだ。

「ご主人様の腕の中は最高なの……」

恋人になったと聞いて、こちらも嫉妬しているのか、抱きついて離れようとしないうちは、挑発するかのようにつつとつぶやく。「せ、背中だつて十分いいわよ。何気に大きいし、抱きつきがいがあるし」

「なあ、二人とも。そこらへんでやめないか？ 出来れば今日中にこの街を出たいんだが」

いつの間にか始まっていた口論は、その刹那の言葉で打ち切られたが、二人とも離れることはなかった。

「別にいいけど、ずいぶん早いよね？ 服とか、武器とか。そういうものは買いそろえないの？」

「ああ、そうだ。だから、朝早くに買いそろえたいんだ」

「ふーん。んう……で、お金はどうするのよ」

ツンデレはどこへ行ったのやら、胸を押しつけてさらにきつく抱

きしめてくる。

刹那は極力、それを気にしないようにする。でないと理性^{タガ}が外れそうだから。

「ああ……そういえばそのまま寝たな。実はな……」

昨日の出来事を話し、瑞希にデーターウィンドウの扱い方——そう難しくはないのだが——を教えてやりたりしてやる。

「じゃあ、私とあんたのお金を合わせたら七万円持つてゐるってわけね」

「そうだ。だから、結構なものを買えるぞ」

「よし、そうと決まったら行くわよ……てあれ？ 情報の更新？」

頭に乗っかるサイズの子犬に変化したクウを乗せ、刹那は部屋を出ようとするが、後ろから聞こえた瑞希の声に足をとめた。

「どうした？」

「えっと、第一層のお店は全部、機械が経営してるって」

「まあ、なんか予想してた通りだな」

この世界の非常識さに、刹那は早くも慣れたのか、少しため息をつくだけだった。

瑞希も、それは同じのようで、桃色携帯を制服のスカートのポケットに入れる。

「じゃ、営業時間は関係ないってことで、早速行くわよ」

「おう……って、なんでお前そんな楽しそうなんだ？」

「何いってんの！ まるっきりデートじゃない！」

「さいですか……」

気恥ずかしい気もしたが、嫌なことではないので、瑞希になされるままに腕を引っ張られていった。

町は、昨日と打って変って閑散としていた。ようやく、混乱が収まったのだ。

「朝だから仕方ないが……ひとけがないってのも不気味だな」

刹那たちは、携帯の地図情報を頼りに、まずは武器のある店へと向かっている。

瑞希は、刹那の言葉のことなどどうでもいいのか、腕に抱きついてにこにこしている。

「っと、ここか？」

しばらくしてたどり着いたのが、盾の上に二本の剣がクロスしている看板のある店。間違いなくここだと判断し、三人は入っていく。

「ふわっ……これは、本格的ね……」

「こういうところに来ると、実感するなあ。地球じゃない、って」

中に入ってみれば、並べられてある棚に壁の棚、さらには天井にまで剣や銃が掛けられてあった。

来たことがないだけに、刹那も瑞希も、あれやこれやとみて興奮する。

「どれにするか迷うわねえ……どれもこれも、四・五千円のものばかりだし……」

「そうだな……武器ってこんなに安いもんか？」

などと、二人で店内を物色すること三十分。

「どこのアーチャーだよ……」

刹那と瑞希。別れて探しているうちに、刹那は某赤い弓兵の武器以外のフル装備を見つけた。と、言っても、赤ではなく漆黒の外装だった。

「二万円……高いのな……」

やはり、本物により近いものを出しているために値段は高い。支給されたお金をすべて使いきることになる。が、

「買ったとしても、残るのは三万……買うか」

所持金五万円の刹那にとってはまだ買える金額であつたため、モデルとして飾られてある外套の横に置かれてある、『アーチャー・フル装備（漆黒 ver.）：20000G』と書かれてある白い紙を取った。

「次は武器、か……」

何がいいか、と思いながら主に武器を中心として置かれてある場所をぶらついていると、ある一つの武器が目に入った。

「やつぱ、刀だな……」

見つけたのは、漆黒の刀身に同色の鞘におさまっている、大太刀ともいえる大きさの刀。

ほかにも違う種類の刀はあつたのだが、なぜか刹那にはそれだけが輝いているように見えた。

それには、先ほどの外套のように白い紙は置かれておらず、それ一つだけがあつたため、手にとって素振りで確認してみる。

「値段は一万……これも込みでか……買った」

その刀——斬破刀——には、拳銃のホルスターにも似た刀を収めるケースが付いている。おそらく、これをベルトにつけることによつて、この刀をぶら下げれるのだろう。

「クウは何かいるか？」

頭の上に乗つて、ぐでえ、としているクウに聞いてみる。

「私は人間の手に慣れないからいいのお。買ったたら服がいいなあ」

子犬クウはしつぱで刹那の後頭部を軽くはたきながら答える。

それもそっか。そう納得して、瑞希を探すことにした。

「やっぱ銃よねえ……超電磁砲^{レールガン}なんだし」

一方の瑞希は、防具などを探すことはなく、自分にあつた武器を探していた。

瑞希はすごい運動神経がいいが、やはり女の子、自慢するほどの筋肉はない。ということで、考えられるのは、拳銃のような片手でも扱えるほど軽いもの。

「あつ、これがよさそうね」

瑞希が手に取ったのは、白銀に輝く自動式拳銃^{オートマチック}。瑞希が見たことのあるものより、分厚く大きい。そのくせ、それほど重さがないというものだ。

「一万円……あう、高い……刹那もいることだし、いつか」

瑞希の頭の中では、服代は刹那持ちということで完結したようだ。

「あ、ホルスターも合わせて一万二千円だ」

結果、刹那と瑞希の合計金額は、若干五千円となった。

刹那のアーチャー装備と斬破刀、瑞希の拳銃、そして瑞希とクウの服代。ものの一時間で財布、というか携帯の中がさびしくなった。

「で、これからどうする？ もう、すぐ行くか？」

何気に合っている刹那の漆黑アーチャー装備。それを見て瑞希は、
「かっこいい……」などつつばやいた後に、

「行ったほうがいいのかもれないわね。ここでうじうじしちゃうられないわけだし」

腰に付けた白銀の拳銃を少し揺らしながら答える。

「クウも、それでいいか？」

「うん。ご主人様がいいなら」

と、いうことで、少量の携帯食料を買った後、この南の町を出ることにした。

この第一層の、というより全層に共通することは、各層の真ん中に次の層へつながる扉がある。その前に、ダンジョンがあるが。

そして、今いるのは、方角でいえば南。つまりは、北へ進んでいけばいい。

三人も、そうやって歩いているわけだが、

「瑞希！ そっちいったぞ！」

「ああもう！ うつとうしい！」

「グウオオウ！」

そう簡単にいくはずがなく、刹那たちは魔獣の群れに襲われている。

最初戦った狼より一回りほど小さいもの、地面からぼこぼこ出ている巨大なミミズ、凶暴化した小熊など。その数は、三十ほど。それらを、刹那は雷をまとわせた刀で、瑞希は雷球を放つ拳銃で、クウは九尾の狼に変化してそのしっぽでなぎ倒している。

「……！ 瑞希っ」

今まさに、瑞希の後ろから飛びかかろうとする狼を、刀で一線ズルリ、と斜めに分けられるオオカミの肉体、そして飛び散る血液。

刀に伝わる、それを切ったりリアルな感触に刹那は顔をしかめる。が、それに浸ることはできず、足元から生えてきたミミズを切り払う。今度は人間とは違う、緑色のそれが舞う。

「クウちゃん危ない！」

一方の瑞希は、意識を拳銃に高め、雷を銃口から放つイメージを

持つて、クウの後ろに控えている小熊に向けて、引き金を引く。

今は、雷球ではなく、放出系の雷。それは、轟音とともに、小熊を飲み込み、消し屑にしてしまう。

「二人とも危ない！」

倒しても倒しても減っている気がしない二人は、周りの注意を散漫していたのか、何匹もの狼や小熊に襲いかかられる。

それを、クウは九本の尾を伸ばすことで凶器とし、確実に心臓部をつぶしていく。

「うえ……気持ち悪い」

刺さった魔獣の死骸を、しつぽを払って落とした。

「ラスト！」

刹那の放った突きが、見事に小熊ののどを貫通し、最後の魔獣の駆逐が終わった。

「はあはあ……な、なんだっていうのよ。もう立てない……」

「お、おれも……肉体的につてか、精神的に疲れた……」

「わう……ご主人様……」

激戦区であるその場で、刹那たちは大きなため息をついて、どっさりと座り込む。

周りを見渡せば、魔獣の死骸で囲まれている。

瑞希はそれを見て口を押さえ、刹那の胸に顔を押し付ける。擬人化したクウも、腕の中を取られた代わりに、背中に抱きついて顔をうずめる。

そして刹那は、その惨状を目の当たりにし、表情を苦痛にゆがめる。

「俺はまだ、剣道で人をたたくことに慣れてっからいいけど、普通の奴じゃ狂っちゃうんじゃないか？」

一言でいえば、グロテスク。刹那も、いくら剣道でも、相手は防具をつけた人間であって、生身の人間ではない。耐性は、ほかより

少しあるといったぐらい。

「私、剣とかだったら無理かも……」

いつも気丈な瑞希も、かなりまいっている。

こうやって、吐きそうになるだけで済むのは、直接打撃の武器ではなく、遠距離攻撃の武器である拳銃であつたからだ。

打撃系の武器から伝わる感触は、なれるものではない。

「ご主人様あ……尻尾とお尻撫でてえ」

卑猥な発言だが、仕方のないこと。武器を持たないクウは、その体で、相手を貫きまくつたのだ。刹那や瑞希の精神的負担の比にならない。

「なぜにケツも……」

「お尻まで変な感触があ……」

それでも、刹那としては卑猥な発言は控えてほしいものだ。

結局瑞希は、刹那の創つた空間に向かって吐いた。

「ほれ、水」

あの場所にとどまり続けるのはかなりつらかったので、三人は移動し、のどかな平原に来ていた。

そこで瑞希は吐いた。

「……ごめんなさい」

見るからに青ざめている瑞希を、とてつもなく不憫に思った刹那は抱きしめて頭を撫でてやる。クウも、心配そうに瑞希の背中を撫でている。

十分くらいして落ち着いた瑞希は、刹那から離れる。が、手を握っていたようで、いわゆる恋人つなぎで強く握りしめる。

「女の子には、厳しいよな……けど、まあ、慣れていかないと、な」
「ん……なら、いつもこうしてくれる？」

「ああ。クウも、だよな？」

「私はご主人様にしてほしいんだけど……ミーちゃんのためなら……」

クウのほうは、野生動物の血が流れているからか、それほど思うところはないようだ。

本当に、立って歩けるようになったのは、落ち着いてから二十分ほどだった。

「で、どこに向かうわけ？」

刹那と瑞希は武器をしまわず、クウは九尾の狼になったままで平原を歩いていった。

「ん……ここから一番近いのは、ラフ村ってところだな」

刹那は、地図のデータウインドウを開いて現在位置を確認する。

三人は、あのあと何度か魔獣の群れに襲われ、気がつけば日が落ちそうな時間帯だ。

そのために、野宿か近くの村に泊まるかという選択をしなければならぬ。

「どれぐらいでつくの？」

「この距離だと……夜にはつくな」

「……………」

「ん？ どした？」

「おんぶ！」

いきなり黙り込んでしまった瑞希を心配し、刹那は声をかけてみる。

と、いきなりうつむかせた頭をガバツと上げ、そうやってきたの

だ。

「は？」

「だあかあらあ、おんぶして、って言ってるの！」

「はあ？　なんで俺が？　クウにのっかりやいいだろ」

刹那の足元に寄り添うようにして歩くクウを見ながら、刹那は言う。

「ダメ！　それじゃあクウちゃんの行動を規制しちゃうでしょ！」

「お前……変なところで気を使うんだな……」

瑞希は何かと人の邪魔になるようなことはしたがらない。刹那以外に、だが。

それを今の今まで忘れていた刹那は、それに頭を抱えなくなる。

そして、これから起こることを予想してみる。今は、刹那に「ぶー」と文句を言っている。その次は、

「もう歩けない！」

先ほどまでおとなしかったのに、突然わがママを言って、その場に座る。

最後には、

「うつ……ひつく……」

泣きだす。

それがたとえ、わがママを通すための嘘泣きだとわかっていても、男である刹那は女の涙には弱い。

またか。そう実際に頭を抱えたあとで、瑞希の前でしゃがんでやる。

「ほら、乗れよ」

「やた！」

やっぱり。と、ため息。

先ほどまでの泣き顔がうそのように晴れ、元氣いっぱい背中に抱きついてくる。

「よおし、じゃあしゅっぱーっ！」

背中に背負った瑞希を落とさないように、心がける刹那。

実は以前にも何回かあった。瑞希の部活帰りに偶然待ち伏せられていたときとか、体育大会の時の借り物競走で、だったりとか。だから、耐性はついている。

が、この背中に感じる柔らかな感触だけは、どうにも慣れなかった。

しかも、恋人同士になったということからか、当時にはあった“恥じらい”というものがなくなり、首を締め付けない程度にきつく抱きついてくるのだ。それはもう、ぴつたりと、隙間もなく。

さらには、

「だあいすき……」

普通ならば絶対に言わない言葉を、刹那の耳元で甘く囁いてくるのだから、赤面せずにはいられない。

「耐えられるかな、俺……」

誰にも聞こえないような声で、刹那は小さくつぶやいた。

「やっと着いた……」

あれから二時間。電球のような光を作って見えているその景色は、小さな集落。

背中にいる瑞希は疲れたのか、すでに眠っている。

「クウ。小さくなって頭に登ってこい」

見える村からは、かすかに光が漏れている。

人が見れば恐怖するクウの九尾狼の姿ではまずいので、小さくなって頭に来させる。

よし、と息をつき、村への道のりを歩む。

本当に、小さい。見ても、数件しか木造の家がなかった。すべての家が見渡せる場所で、強化された視力は、“宿”の文字を見つけた。

南の町より小さいが、それでもこの村では立派な宿。別にノックをする必要もなく、光の漏れているその宿の扉をあける。

と、

「つと、なんなんだ？ あんたら」

クワやら鎌やら斧やらを持った、強面の男たちがそれらを構え、その後ろには子どもや女性が。

「なんだ……おどかせんじゃねえよ」

一番前の、ごついスキンヘッドの男が構えを解く。それと同時に、後ろに控えていた男たちも解いた。

「おどかす、つて……ここは人んちじゃないだろ」

「いや、そうなんだが……ん？ お前、知らねえな」

と、また全員が手に持っている武器を構え始めた。

目の前の男にしてもそうだ。

「いやいやいや、おかしいだろ。ここは宿じゃねえのか？」

「黙れ！ここに貴様の居場所などない！」

後ろに控えている優男風の奴が声を上げる。それと同時に、ほかの連中もうヤジを飛ばし始める。

目の前の男だけは、厳しい表情で睨んでくるだけだが。

「んもあゝ……なんなのようるさい」

刹那の背中の姫が、ついに起きてしまった。

「なんだ？女もいるのか？」

男が、目をまん丸くして驚いている。

見えていなかったのか？と刹那は思っわけだが、「犬もか!？」

などと驚かれていては、キリがない。

だが刹那には、そんなに悠長に構えてはいられない事情があった。それは、

「私の眠りを妨げるなあ！」

瑞希は、寝起きがすこぶる悪いのだ。いや、正確には、眠っているところを起こすと、だ。

起こせば人なり物なり、何でもかんでも当たり散らかす。

「あ、暴れるな瑞希！」

「うるさいうるさいうるさあい！　せつかく刹那と×××しようとしてたのに！」

放送禁止用語。それからも連発で、しかもそれらは刹那と関連しているものだから、たまったものではない。

「ク、クウ！　瑞希の口をふさげ！」

顔を赤くしながらクウにそう命令。ここに来る前にはしゃべるなと言ってるので、クウは何もしゃべらずに瑞希の口に腹をぴったりとくっつける。

「んゝ、んゝ！」

寝ぼけていても、刹那に抱きついていたい瑞希は、クウを手で放すことができないでいる。

「お、落ち着け！　この馬鹿！」

刹那が一喝すれば、瑞希の大騒ぎも収まる。

意外な大声に驚いたのか、その場にいる全員がビクツとなる。

「……ここどこ？」

落ち着いたことにより、クウが退く。

彼女にとって幸か不幸か、寝ぼけた時の出来事はすっぱりと忘れてしまう。刹那にとっては、厄介もの以外ないが。

「ラフ村だよ。そんで宿」

「へえ。ありがとね、おぶってくれて」

ちゅっ、と。瑞希はわざと音を立てて刹那の頬にキスをし、背中から降りた。

ポフン。限界点を突破してしまった刹那の羞恥により、顔をマジメに爆発させた。

「ぬおっ！ 小僧の頭が燃えよった！ 誰か水持ってこい！」

ほのぼのとした光景を見たためか、男たちは武器をしまい、バケツリレーをし始めた。そのなかに、クウを乗せた瑞希も交じっていたのだった。

「えらい目にあった……」

爆発させながらも、焦げていない刹那はすごいといえる。

下にいる男たちは、この世界に来てから村の外から来た人間に会ったことがないらしく、必要以上に警戒していたらしい。

話をしてみれば、みんな気さくな人だった。とりわけ、刹那は小さな子どもに、瑞希は女性陣に人気だった。

女性陣は、刹那との関係や、刹那自身のことを聞いていたことを、刹那は知るよしもない。

そうして今、刹那は入浴中。旅をしてきた刹那の体は、予想以上に疲れて汚れており、湯船が心地よく感じるほど。

服には、刹那と瑞希、両方に汚れ防止をかけているため、それほど汚れていない。

「やっぱ、風呂だよな……」

刹那は、毎週日曜、近くにある銭湯に行くほどの風呂好きである。

特に、剣道の稽古をした後の湯が一番好きなのだ。今はそれに近い状況にある。

ふう、と口元まで使ってあつたまる刹那。

「入るわよー」

「入るのー」

——ブブウ!!

聞こえてきた二つの声に、口元まで使っていた刹那はおもいきり湯を飲み、吐きだす。

「ごほっ、ごほっ……はあはあ、なんで入ってくる」

瑞希のほうを振り返ってみれば、白いビキニの水着を着た瑞希。と、同じように淡い青色のを着たクウ。

「あら、いいじゃない。彼氏彼女なんだし」

「いや、それは関係ないと……」

「ご主人様は嫌なの？」

刹那は瑞希を問い詰めようとしたが、クウの涙目攻撃によって、それは中断。

それを見た瑞希は、素早く刹那の前につかり、抱きつく。

「お前……俺をなんだと……」

「私の彼氏よ……んちゅ……」

「んう!？」

「ああ！ 私も！」

突然、瑞希が唇を、刹那のそれに重ね合わせてきた。

そしてそれに嫉妬したクウが、刹那の後ろに回って抱きつく。そ

れで満足したらしく、クウはその背中に頬ずりをし始めた。

「ふふん。私のファーストキス」

甘えるように抱きついてくる瑞希に、刹那の息子が立たないわけがない。が、そこは運がいいことに、言霊の力で鎮めれた。

「ファースト、ね」

「なに？　もしかして、私が初めてじゃない、とか？」

恋愛に関してはどこまでも純情な瑞希。自分が初めてでないと知って、激しく落ち込んでしまう。

「はあ……覚えてないのも仕方ないが、ずいぶん前にしたぞ？　俺とお前」

「へ？」

「ほら、お前が中三の時、勉強合宿ってやったろ？」

「うん」

「そんなときだよ。お前が寝ぼけて、俺にキスしたんだ。その、深いほうをな」

刹那は、右手で瑞希の頭を撫でながら、左手で頬をポリポリと掻く。

一方瑞希は、顔をかあく、と赤く染めていき、刹那の胸板に額をつける。

「うん、だからまあ……気にすんな」

それから瑞希はしばらく、刹那の顔を見ると頬を染めるのであった。

第五話 戦い（後書き）

ども。いかがでしたでしょうか？

最後らへん、ちよつとあれでしたかね……。グロイ戦闘シーンがあつたのでやってみたわけですが。

これは残酷表現のうちに入るんでしょうか……？ 自分ではよくわかりませんね。

というわけで宣伝を。一気に十二話まで更新した、主人公最強物語『竜と世界と最強夫婦』もよろしく願います。

ではこれで。次回もよろしく願います。

ギルド創立（前書き）

ども、コウです。更新、遅れてしまつてすみません。筆がどうしても進まなくて。何とか完成しました。

と、いうことで、今話もよろしく願います。

ギルド創立

薫たちは、始まりの町——北の町で、ギルドを立ち上げる下準備をしていた。

「ギルドを作る条件、ってなんだっけ？」

「立案者を含め、五人のギルド加入者が必要。……てことだけだな」

香苗の質問を、健吾は、手元にある『ギルド建設要項』の紙を見ながら答える。

健吾の持っているその紙は、部屋にある本棚の『ギルドの書』に挟まれてあったものだ。

「あと一人、ですか……すこし、難しいかもしれませんね」

椎奈が難しそうな顔をして言うのも当然だ。

もともと、ランダムかなんかで選ばれた人間の中で、知っている人を見つけるのは難しく、見つかる確率はごくわずか。その点、薫たちはとても幸運だといえる。

「でもでも、声かけてみれば、何とかなるかも、だよ？」

自分は女の子、と一晩中自分に暗示をかけて、目の下に隈をつくっている薫は、ベッドでゴロゴロしながら提案してみた。

確かに彼——彼女の言うとおり、この世は悪人ばかりではないのだから、それは一理あるといえる。……善人ばかりではないということも事実なのだが。

「だがなあ……快く答えてくれる人がいるか、だな……」

善人悪人云々の前に、この世界に来て一週間もたたない今では、混乱した状態のままだと判断するのが妥当。

「こーゆーときは、当たって砕ける、何とかなるさ、だよ」

「たまには、香苗の行動性が役に立ちますね」

「たまには、って……ひどいなあ、しいちゃん。まあいいや。ほらほら、けんけん行くよ！」

香苗が椎奈の発言に軽く傷つくが、すぐに立ち直って健吾の手を引っ張っていく。

薫と椎奈も、二人を追って宿を出て行った。

時刻は、午前八時。

五時間。四人は町中を駆け回って、たった一人のギルド加入者を探していた。その時間の中には、これからの準備というものも含まれていたが。

「うう……なんで誰も拒否るの……」

昼時ということで、宿の一階で昼食を取っている。

昼食は、機械のメニューボードで選択すれば、機械が選んだメニューを持ってくるという仕組みだ。昔と近未来が混ざったような感覚に陥る。

「当然といえば、当然ですね。誰も、戦いなんて知りませんし、かくいう私たちも、実戦経験が豊富なものではありません」

「そこはあ……みんなでカバーでしょ」

「でも、このメンバーに知らない人が入ったら、バランス崩れるかも」

「薫の言うとおりだな……ある程度、というか、かなり協調性のあ

る人限定になるな、今の状態だと」

「だったら……すんごく限られてくんじゃん……」

せかせかと手を動かしながら、閑散とした食堂の中で四人は話し合う。

いくらか話し合ったが、とりあえず今は人数集めということで話がまとまった。

そして、今度はお金の問題が浮上したところだ。

四人の給付されたお金が八万、黒い熊を倒した三人にはそれぞれ二万ずつ与えられ、それで合計十四万。

高校生の身分とは言え、十万を超えるお金を自ら持ったことのない四人は、計算が狂って残りわずか一万というところまで来たのだ。買ったものは、それぞれの新しい服や武器、それと保存食を少し。

活発な女の子こと香苗は、女子サッカーをしていたからか、自分の意思で操れる、鉄より硬くサッカーボールより軽い、操作球。

学校では頼れる弓道部のエースの椎奈は、折りたたみ式の軽くない弓。

薫は、一時期刹那に剣道を教わっていたために、日本刀を。

そして健吾は、悩んだ末にファンタジーでは王道の長剣を買った。

どれもこれもが、決して安いものではなかったため、そして買った服もそうだったために、今を苦しんでいるのだ。

ううーん、と四人が悩んでいるところに、

「真っ先にギルドを立ち上げようとしてるのは、貴方達か？」

驚く四人が一斉に顔を上げる。

声の持ち主は、やたら背が高い女性。茶髪のポニー、切れ長な目が特徴的な、カッコいい女性だ。

「……聞いているのか？」

何も言おうとしない四人に、困ったように目じりを下げる女性。

それが、健吾のツボに入ってしまったというのは秘密だ。

「あ！……つと、そうだが、もしかして入ってくれるのか？」

見惚れていた健吾だが、声をあげて我に返り、少し興奮しながら聞く。

「と、いうことは加入していいのだな？」

「もちろん！ こっちがお願いしたいぐらいよ！」

中でもギルド加入者搜索に一番張り切っていた香苗が、嬉しそうに声を上げる。

「そうか……その二人はいいのか？」

そう言って、女性は薫と椎奈のほうへ顔を向ける。

二人とも、願ったりかなったりなのは同じのようで、すぐさまうなづいた。

「私は宮本朱音^{あかね}という。よろしく」

朱音が自己紹介したのをきっかけに、四人も自己紹介をした。

「で、朱音の能力ってなんなの？」

「私のか？ 私の強化^{フォース}だ」

「どんなの？」

「身体能力を底上げしたり、物の硬さを強化したり、とかだな」

「へえ……便利そう」

さつきから香苗しか質問をしていない。というものの、健吾はまだ腹が満たされていないのか、注文を繰り返し、椎奈は優雅に紅茶を、薫は下をうつむいてブツブツと何かをつぶやいている。

「宮本朱音、宮本朱音……ううん、どこかで聞いたことあるんだけ

どなあ」

「薫さん？　どうかしたんですか？」

「みやもとあかね……ああ！」

さすがにブツブツつぶやいている薫が不気味になってきたのか、椎奈が問いかけてみると、薫が突然立つ。

「確か、中二の時、セツ君が全国大会の決勝で戦ったんだ！」

刹那は、剣道をやっていた。中二の時まで。

なぜやめたかといえば、さまざまな理由がある。ただなんとなく強い人がいないから。目立つのは嫌いだから。

刹那にとって最後となる剣道の日本一を決める全国大会。ほぼ一瞬ですべての試合の片をつけ、宮本朱音と優勝を争うこととなったのだ。

女性にしては珍しく強く、刹那も苦戦を強いられた。

なんせ、朱音は二刀流。女性ということと、彼女の持ち前の素早さを生かしたもので、戦法もそうだった。

バランスがいい刹那は、一点に特化している朱音は苦手といえる相手なのだ。

「セツ君……？　もしかして、桜野のことか！？」

決勝、セツ君。それらの言葉でわかったのか、朱音は椅子を蹴飛ばさんばかりの勢いで立つ。

「う、うん、そうだよ……」

人のことは言えない薫も、その勢いに押されたのか最後は儚い声

になる。

薫がおびえていることに気がついた朱音は、すまない、と謝りを入れて落ち着き、席に着く。

「……桜野のことを知っているのか？」

深く息をついたのち、朱音は質問をする。

薫も、おびえることはせずに、こくんと頷く。

香苗と椎奈と健吾は、成り行きを見守っている。

「そう、か……も、もしかして君は、あの人の恋人なのか？」

もじもじと、見た目のカッコよさとは裏腹に、かわいらしいしぐさを見せながら聞く朱音。

それをぼかんとしながら見つめていた薫だが、意識を取り戻し、悟る。

——ライバル！

それを口にするのではなく、薫はいたって平然な顔をして答える。

「ううん。幼馴染だよ………今はね」

ぼそりとあとにつぶやいた言葉が聞こえなかったのか、ほっと朱音は息をついている。

「もしかして、あかねんってばせつつんのこと好きなの？」

からかうようにして聞く香苗の言葉に、顔を真っ赤にさせる朱音。
「な、なななな、なにをっ！ わ、わたしはただ！ 初めて負かされた相手のことが気になっただけで！」

「ホントかなあ？ すうっごく好きなんじゃないのぉ？」

噛みまくる朱音に、じと、と嫌な視線を浴びせ続けながら、香苗はねっとりとした口調で朱音を追いつめる。

「うう、ううう………」

「はいはい、香苗。それくらいにしたらどうです？」

真っ赤になつて何もしゃべれなくなつた朱音を救つたのは、紅茶をくいつと飲みほした椎奈であつた。

朱音の反応を見て、すでに満足していた香苗は、それで引いた。

「よし、じゃあギルド申請に行くか」

健吾のその一言で、全員宿を出た。

ギルド、正式には『ギルド創立申請所』は、この街の中心にそびえている、塔のような建物だ。

ギルドを創立すれば、各地に存在するそこに泊まることができる。人数を設定すれば、その人数分の部屋ができるといふ、何ともハチャメチャなシステムである。もちろん、そのギルド専用の建物を建てることができる。

とはいえ、この始まりの町のような、大きいといえる街にしか存在しないのだ。

「創立立案者……俺だよな……加入メンバー……なあ、みんなここに名前を書いてくれるか？」

ギルド内には健吾たち以外にはいなかった。

なので、何も待つことはなく、機械が吸ってくれた立案計画報告書を、リーダーである健吾が書いているところだ。

「創立目的……？」

「ただ単に、一人じゃ心細いから、でいいんじゃない？」

最後まで順調に書き続けていった健吾だが、最後の回答欄のところで困っていた。

すると、ひょこりと香苗が健吾の肩越しに現れ、そう助言してくれる。

「そ、そんな簡単なものでいいのか？ も、もっとこう、壮大とか、ないのか？」

少し頬を紅潮させながら、健吾は言う。わけは簡単。香苗のアレが当たってるからだ。

「えー？ でも、実際そうじゃん。ま、私たちはせっつつんたちとの合流のためだけだね」

「そうか……じゃあ、仲間集め、はどうだ？」

「んー……その通りだし、いつか」

目的のような、目的でないような。とりあえずな目的はそれで決めた。

ちなみに、ギルドの名前は「ギャラクシー」となった。

「もっと力込めろ！」

「はあはあ……うつす！」

「アツいわねえ……刹那」

「ご主人様ー！ がんばれえ！」

ギャラリーの歓声。鳴り響く木の乾いた音。とぎれとぎれの息継ぎ。

刹那は、この村にいる同い年くらいの少年の指導をしていた。なぜこのようなことになったかという、それは三十分ほど前までさかのぼる。

昼すぎ。刹那は、クウを頭に載せた瑞希とスキンヘッド男——エディという名前だ——とともに雑談をしていた。

「んで、小僧は何やってたんだ？」

「せめて名前で呼べよ……まあいいけど。ん、何、つつわれても……例えば？」

珍しいことでもないが、最近クウとご無沙汰だった瑞希は、肉球をふにふにといじって遊んでいる。

その横で、刹那とエディはコーヒーを飲みながら話しこむ。

「例えば……じゃあ、スポーツは何してんだ？」

「それだったら、剣道かな？　って、わかるか？」

エディはブラジル人。そのため、剣道を知っているか、一応確認したのだ。

ちなみに、なぜ言葉が通じるのかは分からない。

「おお、ケンドーか。知ってるぞ。棒でたたく奴だろ？」

「棒、って……まあ、そんな感じだ」

「へえ……俺はバスケやってたかな。遊びで」

このような感じで、地球での自分の話に興じていた二人。ずいぶん仲が良くなったところで、

「あ、あのっ！」

声をかけられた。

刹那が振り向くと、そこには珍しい赤毛の少年。腰には、真新しい剣がぶら下げられている。

「なんだ？」

「セツナ・サクラノさんですね？」

そばかすを浮かしたその顔を、ずいとは刹那に近づけ聞いてくる。

あまりの迫力に、というか今にもキスしそうな勢いだったので椅子とともに一歩引き、コクコクと頷く。

「僕を弟子にしてください！」

顔が退いたと思ったら、すごい勢いで土下座をしたてきた。

刹那はもちろん、エディもクウと戯れていた瑞希も目を丸くする。

「はっ？ えっ？ いや、なんの？ ってか、なんで俺のこと知ってるの？」

「サクラノさんは世界で一番強いケンドー家として有名ですよ！」

「そ、そうなのか？」

「はい！ だから、僕に剣を教えてください！」

言われても困る刹那。

確かに、剣術の腕前はかなりのものだとは自負している刹那だが、教えるのはあまり得意ではない。

教えられても、基礎程度。それから先は、自分で技を編み出してもらうしかないのだ。

「いいんじゃないの？ どうせ、この世界じゃ戦わないと生きていけないわけだし」

「嬢ちゃんの言うとおりだ。この村じゃ、若いもんがその小僧含めて数人しかいねえからな。即戦力まで育て上げてくれや」

二人の言葉もあつて、とりあえずということで、刹那がその少年のけいこをすることになったのだ。

「せああ！」

刹那に何度も立ち向かい、何度も吹き飛ばされ、ぼろぼろになった少年——ロンはそれでもまだ剣をふるう。

刹那も、それに合わせて鞘に入れたままの刀で対峙。

拮抗する剣と刀。

だが、少年が必死なのに対して、刹那はそれに合わせている。

「さつきから言ってるだろ。剣に力を乗せろって。じゃねえと——」

刹那は力を込め、簡単にロンの剣を上にはじく。

がら空きになった胴に向け、

「すぐに死ぬぞ？」

寸止め。これがもし、直撃していたなら、たとえ鞘におさめた状態であっても、骨が折れることは確実だった。

刹那が一瞬とはいえ殺気を出して脅したためか、ロンはへなへなと腰を抜かしてへたり込んだ。

「よし。まあこれくらいだろう」

そして開始から約二時間。精も根も尽き果てたロンに向かって、刹那は告げる。

すると、ロンは緊張が解けたのか、腰を落とした。

「ま、大体のことは教えたから、俺がいなくてもどうにかなるだろう」

ロンに近づき、刹那は手を差し伸べる。

ロンは、礼を言いながら手を取って立ち上がる。

「はあ、はあ……あ、ありがとうございました……」

ふらふらとよろけながらも、頭を下げるロン。

その頭をぐしゃぐしゃと撫でて、刹那は宿へと戻る。

「お疲れさん」

宿の前にあるベンチで、膝にクウを乗せて観戦していた瑞希が、冷水の入ったコップを渡してきた。

「サンキュ」

コップを受け取り、水を流し込む。

いくら相手が素人だからといって、いや、素人だから手を抜けなかった刹那は、ロン以上に緊張してしていたのだ。

だから、瑞希の気遣いありがたかった。

コップを返し、代わりに渡してくれたタオルで汗をふく。

本当に、気遣いができている。

そう思った刹那は、とりあえず感謝の意味を込めて頭を撫でてやる。

「？」

疑問符を浮かべながらも、嬉しそうに撫でられる瑞希。

ついでに、唸っていたクウも撫でてやった。

翌日。

「おいおい。ほんちに行っちゃうのか？」

旅支度を終え、もう出発する刹那たちに、エディはたまらず声をかけた。

「ああ。この世界を抜けるために、早く行かなきゃな」

「まあ、そういうことね。あんたたちも、早くこの村から出るなりして、強くないと。この先何がおこってもおかしくないのよ？」

「そりゃ、そうだが……」

なおも渋るエディ。

それほど悠長に構えられる状況ではないので、エディに構わず刹那たちは歩きだす。

「し、師匠！」

次に呼びとめたのは、ロン。なぜだか、子の呼び方をやめないのだ。

「あ、ありがとうございます！」

そして、頭を下げて、一礼。

数秒間、深々と腰を曲げたロンを、刹那は見つめる。

次に、ぱつと上体を起こし、

「俺、強くなります！ 師匠の隣に立てるように、強く！」

たった一日しか稽古をしていないのに、こんなにも支持してくれるロンに、少し気恥ずかしくなる刹那。

右頬を指で搔き、刹那も返す。

「ああ。俺も、楽しみにしているぞ」

再び頭を下げたロンに、刹那は背を向け、瑞希とともにラフ村を出た。

ギルド創立（後書き）

ども。

刹那たちの滞在時間、少なかつたでしょうかね？ でも、あれ以上となると、かなり難しいような気が……。

とにかく、今話も読んでくれてありがとうございます。

では、『竜と世界と最強夫婦』、これからかき続けていこうと思う『幸せをその手に』。この二作品もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3770j/>

リアルワールド

2010年10月9日14時49分発行